

氏 名	荻 本 快
学 位 の 種 類	博 士 (教育学)
学 位 記 番 号	甲 第 190 号
学位授与年月日	2015年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	青年期初期における両親への同一視の意味 (The Meaning of Identification with Parents in Early Adolescence)
論文審査委員	主 査 教 授 磯 崎 三喜年 副 査 名誉教授 小 谷 英 文 副 査 教 授 森 島 泰 則 副 査 上級准教授 西 村 馨

論文内容の要旨

本研究は、青年期初期（11歳から13歳）の両親に対する依存と独立の葛藤およびその克服に向けた親への同一視機制的心理学的意味について、調査により実証的検討を試みたものである。その立脚点は、Besser & Blatt (2007)の研究にある。彼らは、同性親への同一視機制を編成させることによってこの葛藤を解消できるとし、同一視機制編成の失敗により、異性親へ同一視することは、男子の外向的問題、女子の内向的問題に影響することを実証的に示した。この研究は、青年期における同一視機制的発達理論の中に定位して捉えることが重要となる。そして、その概念構成の弱さと問題点を指摘しつつ、精神分析的発達理論を踏まえた両親への同一視という視点を加え、新たな視点から実証的な検討を行っている。

まず、Besser & Blatt (2007)によって提唱された理論の妥当性を問うことを出発点とし、青年期初期の依存と葛藤に際して、同性親への同一視だけでなく、両親への同一視がいかなる意味を持つのかを中心に、性別特異的問題（外向的問題、内向的問題）と性別同一性（性役割同一性、性的同一性）に与える影響という視点も加え、青年期初期発達理論を再構成することを目的とした。

予備調査を踏まえ、本調査では、青年期初期の中学生 361 名（男子 153 名、女子 208 名）の協力を得た。これらの参加者は、自由記述式の Object Relation Inventory (Waniel, Besser, & Priel, 2006)、Youth Self Report (Achenbach, 1991) および本研究で開発された Early Adolescent Gender Identity Scale に回答した。また、調査は、参加者の回答への配慮とその任意性について十分な説明がなされていた。

その結果、予想とは異なり、男女ともに、母親への同一視が成果による自らの定義に影響を与えていた。また、異性親への同一視が、異性愛指向の発達に影響をおよぼすことが見られたが、これは男女で意味が異なることが示された。さらに、Besser & Blatt (2007)によって示された異性親への同一視のもつ外向的問題への影響は、同一視編成がなされたと考えられる同性親への同一視群においても同様に見られ、理論の修正を示す結果となった。むしろ、両親に対して均等に同一視することが、外向的問題と内向的問題を抑制する効果があることが見いだされ、青年期初期の発達における両親への均等な同一視がもつ意味をより強く示すものとなった。こうした両親への均等な同一視は、異性愛指向にも抑制的に作用していた。

本研究の結果は、Besser & Blatt (2007)によって提唱された同一視編成理論の修正と青年期初期の発達理論の再構成を迫るものである。今後、両親への同一視という視点を踏まえた性別特異的問題と性別同一性の発達に与える意味を深めるべく、さらなる検証が期待される。

論文審査結果の要旨

子どもから大人への発達移行の問題は、アメリカ心理学史草創期からの中核的テーマでありながら、十分な展開を見ていない。この行き詰まりを打破すべく、Besser & Blatt(2007)が、同一視編成理論を提出し、その実証研究に先鞭をつけた。子どもから大人への発達展開の心理学的テーマを「依存と独立の葛藤」と定位し、暦年齢11歳から13歳の青年期初期に内的対象表象構成に大きな質的転換があることを見出した。中でも、「青年期初期に同性親への同一視の凝集を行わずに、異性親を理想化すること」を「同一視編成不全」と称して、心理学的問題を現す青少年がその特徴を表すことを調査により示したことは注目された。それは臨床理論を支持する画期的な結果であったからである。しかしながら同一視による対象関係の他の可能な発達様態や関与変数との関係が確認されていないため、発達理論に組み込む一般化にはまだほど遠いものがあつた。

本研究は、青年期初期に発達の的に定着する同一視の様態すなわち対象関係パターンと性別が、心理学的な問題、性役割同一性、性的同一性、との関係において特異な特徴を見出せるかどうかを検討し、Besser & Blatt 理論の真偽を問い、この時期の発達理論の再構築に一石を投じようとするものであつた。調査研究は、この時期固有の性別同一性の達成様態を測定する尺度の開発をもって組み立てられ、Besser & Blatt 理論に関与する変数のそれぞれにおいて極めて興味深い仮説検証が行われた。結果、理論の真偽がと言うより、Besser & Blatt 理論が単純化され過ぎていることが明瞭になり、父親表象の生成に関わる日米の文化差も示唆された。Besser & Blatt 理論の異性親への同一視は、両親表象がより高度に凝集している男子において依存と独立の葛藤克服に関わる心理学的な外向問題と関係があることは認められたが、女子の内面的問題については認められなかった。彼らの原理論は、同一視編成不全が男子の外向的問題と女子の内面的問題とに関係するとする通説を支持するかのようすっきりしたものであつたが、臨床理論の延長で同一視編成不全群のみの心理学的問題の特徴を見るだけでなく、親への同一視様態のすべてのパターンを相対的に検討して行くと、より複雑な変数間関係が露になった。それは臨床理論の裏付けのみで、人格発達理論への一般化は成し得ないということを示した点でも大きな意味があり、さらに女性が「依存と独立の葛藤」を超えて成熟へと展開する発達過程は、単に男性の裏返しではなく、質の異なる変数間関係による力動がそこにあることを示唆もした。

本研究は、発達ラインそのものが男性と女性によって異なつた構成展開にある可能性を強く示唆した。長く暗黒時代と言われて来た女性の人格発達研究の壁を突き崩す起点を青年期初期に置くなら、その後の展開に男性とは質の異なる対象関係編成のダイナミズム展開が仮定できる。女性の人格発達研究を進める新たな扉を示したとも言える。

依存と独立の葛藤を克服する青年期初期からの発達過程に生じる臨床問題の深刻

化に対して、同一視機制とその成果としての内的対象関係編成の発達が必要な意味をもっているとする Besser & Blatt に始まった発達原理理論の実証を追究する本研究の流れは、臨床理論の実証、臨床技法の再編、心理学的問題の予防養育の再編、そして人格発達一般理論の再構築に関して、それぞれに貢献の大きい研究として評価できる。

審査委員会全会一致で、本研究成果と今後の研究展開の可能性における学術的価値を高く評価した。